

海外の登山

チョモランマ北稜～北東稜から大量登頂 1998春

近藤 和美

日本勤労者山岳連盟初のチョモランマ(エベレスト8,848m)遠征計画は1995年夏,近藤がヌン(7,135m)とダウラギリ1峰(8,167m)に連続して出かけている留守中に,労山海外委員会で(近藤が隊長を務めることを前提に)近い将来のエベレスト登山実行が話し合われ芽吹いた。ただ当時,私自身もいずれはエベレストへ行かなくてはと考えてはいたが,それにふさわしいメンバーがそろえられるかどうかには確信が持てていなかった。9,000m近いエベレストは他の8,000m峰と同列には論じられない。人材育成やその他の準備活動などを考え合わせると,やるならその前に少なくとももう1回,それも超高峰として位置づけられる8,500mクラスの手で経験を積んでから実行したほうがよいと考えたからである。しかし自分の年齢を考えるとあまり先延ばししないほうがいいことも確かだ。私はベースキャンプでトランシーバーを握って隊員に指図するだけの隊長を務める気など毛頭なかった。

その秋,ヌンに続いてダウラギリも成功裡に終えられて帰国し,思い切って97年秋にプレ登山としてローツェ(8,516m)に登る計画と合わせた98年春の遠征実行を決定。隊員公募を開始したのが96年春のことであった。ルートはネパール側南東稜からのほうがいくらか登り易いといわれるものの登山料が超高額でとても負担し切れないので,チベット側の通常ルートを採用した。

結果はローツェ登山は10人もの隊員を得,しかもそのうち7人もが引き続きチョモランマにも参加してくれることになって,実力引き上げの観点からも期待どおりの成果が挙げられた。チョモランマに8人登頂の日本隊新記録というような大成功を勝ち取る上でこれらのメンバーは決定的な大きな力を発揮してくれ,プレ・チョモランマ登山の実行が適切かつ有意義だったことが立証された。このほか,全国組織の強みとしてTシャツ,テレホン・カードの販売活動,BC訪問トレッキング団員募集などの支援事業も進めていったが,これらは登山活動を支える上で実際に大きな力になった。

チョモランマの具体的な戦術としては,チベットでの登山にいつも付いて回る問題として,非常に高々度にあるBC(5,150m)まで車で短日数で入れてしまう便利さと引き換えに,必然的に見舞われる高度障害の回避が重要課題となる。だが我々の場合はさらに一步進めて,チョモランマ登山の事実上の根拠地となるABC(6,400m)高度にも完全に体を慣らした上でチベット入りする作戦を立てた。さもないと,ABC高度に順応するまでBCからの長い距離を何度も往復しなければならず,体力的にも日数的にも非効率だからである。順応した体ならBCから2日歩くだけでABCに定着できるが,未順応ならBC高度への順応とは別にさらに1～2週間をみなければならない。そこで我が隊は同じ日数をかけるなら,ネパール側のメラ・ピーク(6,473m)で順応登山を実施していくことにした。

チベット入りする時期については,今季チョモランマに挑む他の日本隊3隊(昭和山岳会隊,テレ

1. 登山記録

ビ朝日隊、小西浩文氏ら)がいずれも3月末から4月初めに移行することにしていて、我々は半月以上遅い4月半ば過ぎに設定した。4月上旬までは往々にしてチベット領内の道路が除雪遅れで開通していない可能性があること。それに4月中は一般的にまだ冬の名残で強風の日が多く、登山活動が妨げられやすいので、それを避けるためでもあった。道路が確実に開通し、風も和らぐまでの間はメラ・ピークに登っておればチベットに持ち込む物資も減らせるし、一石三鳥、四鳥になるはずとの読みからであった。高所ポーター(クライミング・シェルパ)はサーダーとしてなじみのペンバ・ツェリン以下8人を雇用した。

隊員名簿 ●隊長 近藤和美(56)東京 ●隊員 永田幸一(40)東京/坂本正治(38)東京/橋本久(45)岩手/倉橋秀都(38)東京/佐藤賢(44)新潟/桑原巖(62)長野/川原慶紀(57)長崎/矢野利明(45)京都/西嶋鎌太郎(55)石川/正木直子(41)石川 ●ABCマネージャー 大神田伊曾美(54)東京

行動日誌

〔1〕メラ・ピークで順応登山

3月15日 先発隊(近藤以下3人)日本出発、カトマンズ着。諸準備活動に移る。

3月22日 本隊9人もカトマンズ入りし、全員がそろそろ。

3月24日 メラ・ピークに向かうため国内便でルクラへ飛ぶ。夜、宿に我々より3週間ほど早く日本を出て、クアンブ地区で順応してこられた昭和山岳隊およびテレビ朝日隊の訪問を受け、歓談する。

3月25日 キャラバン開始。ネパール・スタッフ(シェルパおよびコックら11人)もチョモランマにベスト・コンディションで臨めるよう、全員を参加させている。

3月29日 カーレ手前にメラ・ピークBC(4,800m)を建設する。この日、夕刻から降り始めた雪は夜どおし降り続き、翌日夕刻によくやむが、新雪約70cmもの大雪であった。

3月31日 ほぼ全員でメラ・ラまでの高度順応に出かける。天候は終日快晴となり、以後数日続いた。

4月2日 隊を二分し、1次隊がメラ・ピークに登頂。翌日には2次隊も登頂するが、BCには先日の大雪でその帰路を案じていたポーターたちがザトルワ峠のルクラ側斜面で雪崩に遭って5人が死亡、および国際託送便の荷が輸送途中で紛失してしまいカトマンズに未着、との報が入る。

4月4日 近藤、永田は善後策を講ずるためサーダーらと共に急ぎ下山の途につく。

4月6日 1次隊はチベット入り後、速やかにチョモランマABCに上がって活動できるだけの順応獲得を目的に、再度メラ・ピークに登り、頂上直下の雪原にC2(6,400m)を設営し宿泊。

4月7日 2次隊もC2泊。一方、近藤、永田は空路カトマンズに帰着し、8日に紛失隊荷の代替品を支援トレッキング隊に持参してもらおうべく品目リストを作成して日本へファックスする。

4月9日 高度順応を完了した本隊、チャーター・ヘリでメラBCからカトマンズへ帰着。

1. 登山記録

4月10～16日 改めてチョモランマに向けた準備活動とたっぷりした休養を取る。

〔2〕チベットへ移行し、チョモランマ登山を開始

4月17日 チャーターしたバスとトラック各1台で陸路、国境のコダリへ。ザンムーで中国登山協会の趙玲玲連絡官（女性）と金俊喜通訳の出迎えを受けて中国に入国。ジープ6台とトラック2台に分乗してネーラムに向かうが、途中今までこの時期には見たこともない巨大なデブリが道路を塞いでいる現場に遭遇。数日前にようやく残雪を掘割状に切り開いて開通させたそうだが、それまで先行した日本各隊はずっと足止めを食っていたという。翌日はシガールに泊まり、19日には予定どおり昼前にチョモランマBCに到着しBC建設。仰ぎ見るチョモランマはさすがに雄大で気高い。

4月20日 昼過ぎ、貫田宗男氏をツアー・リーダーとする第1次支援トレッキング隊10人が到着。もともと輸送を依頼してあった荷のほかに、例の紛失してしまった国際託送便の荷の代替品も受け取り、支援隊のありがたさを噛み締める。ところで、2度のチョモランマ登頂を始め、遠征経験豊富な貫田氏は我々の隊荷の少なさ（約2.5ト）にこれでチョモランマが登れるのか、と半ば呆れぎみ。確かに隣に設営されている昭和山岳会隊の豊富な物資と比べられると我々のは見劣りする。人員が我々とほぼ同規模の同隊は帰国後に見たTBSテレビの報道では隊荷は9トということだった。なお、日本各隊は例の道路の開通遅れでBC入りまでに約10日間を要したそうだが、その後も数日前まで強風続きで思うような行動ができていないと話されていた。我々は入域を急がなかった作戦がズバリ的中した。

4月21日 近藤と大神田は支援隊接待（？）の任に当たるためBCに残り、他の10人はシェルパや荷揚げのヤクと共にABCに向けて出発。ABCまでには標準的なキャンプ地としてC1とC2があるが、メラ・ピークで順応してきた我が隊は初日にいきなり中間の5,850m地点のキャンプ地まで進む。

4月22日 本隊は6,400mのモレーン地帯に到着し、ABC（C3）を建設。チョモランマ登山の事実上の根拠地だが、ここに定着した日本隊は我々が最初となった。近藤、大神田も支援隊の出発を見送った後、BCを立つ。翌日、本隊はキャンプ地の整備作業に従事し、近藤、大神田もABCに入る。

4月24日 登山活動開始。先行隊（倉橋ら6人）がシェルパらと共にチョモランマ北稜上のノース・コル（7,066m）往復に出発。氷河内院の雪原を進み、突き当たりから高度差約500mの氷雪壁を固定ロープ伝いにたどる。最低コルより少しチャンツェ峰（7,583m）寄りの稜上に抜け出た所にC4（7,100m）を設営した後、ABCに帰着。翌日、後行隊（近藤ら5人）もノース・コルを往復する。

4月27日 プジャ（安全祈禱）を行なった後、先行隊はC4へ移動。

1. 登山記録

- 4月28日 先行隊は北稜の7,700m付近まで往復後ABCへ。後行隊はC4へ移動。
- 4月29日 後行隊はおおむね7,600m前後まで往復の後、ABCに帰着。先行隊は休養。
- 4月30日 全隊員休養。一方、シェルパの一部は8,000mまで達する。
- 5月1日 先行隊C4へ移動。また、この日アン・ギャルゼンとマン・パドゥールは昭和隊やインド隊のシェルパらと共同でC4から長駆C6までのルート工作に出かけ、固定ロープ未整備の8,000m以上での工作に従事するが、湿った手袋で行動していたアン・ギャルゼンは指先に凍傷を負った。
- 5月2日 先行隊C5目指して出発。ノース・コルから7,600m辺りまで続く雪壁状の雪稜を登りつめ、そこからは岩の間を縫うようにしてミックス帯をたどるとC5(7,700m)に着く(無酸素宿泊)。アン・ギャルゼンはABCに下ってくる。重症ではなさそうだが、この登山中に回復する見込みはない。高所で安定した力を発揮する彼の離脱は痛い。早目に低地へ下ろすことにする。後行隊はC4へ移動するが、シェルパの行動や荷揚げ状況を管理・把握するために近藤のみABCにとどまる。
- 5月3日 先行隊は少しでも高い地点まで無酸素で達しておくべくC5を出発する。頂上アタック時に酸素を使うのだったらこれ以上の順応は不要という考え方もあるが、我が隊はアタック途上や帰路に万一酸素器具の故障や酸素切れなどに見舞われても危地に陥らないですむよう、出来るだけ高々度まで順応しておくことにしていた。全員8,000m前後までの順応を果たし、ABCまで下る。後行隊はC5へ移動し、近藤はC4に上がる。大神田は第2次支援隊出迎え準備のためコックらとBCへ下る。
- 5月4日 後行隊は、桑原までもがC5での無酸素宿泊をこなすが、62歳という年齢でこの高度まで無酸素で達したことを含めて自己新記録のみならず日本新かも知れない。ともあれ後行隊も概ね7,800~7,900m付近まで無酸素で往復の後、C4で近藤と合流し共にABCへ帰着。先行隊はBCに下り、到着した第2次支援隊17人と交歓。差し入れされた新鮮野菜・果物、日本語出版物などがうれしい。
- 5月5日 連日C4、C5までの荷揚げに励んでくれているシェルパらはBCには下らず、休養もABCで取ることになっている。隊員の留守中もC6までの荷揚げの続行を託し、後行隊もアン・ギャルゼンを伴ってBCへ下る。
- 5月6日 ザンムー経由で明日にはカトマンズに着く支援トレック隊にアン・ギャルゼンを託し、一行のBC出発を見送る。我々の入山以来、幸いにも比較的穏やかな天候が続いてほとんど予定どおりの行動が出来ていたが、この日から崩れて強風が吹きまくる中、休養に専念する。

[3] BCでの休養を終え、再度上部へ

- 5月10日 各自BCでの4~5日間の休養を終え、いよいよ最終段階の頂上アタック目指して全員で

1. 登山記録

BCを出発する。中間キャンプ泊。

5月11日 ABCに向かうが、桑原は不調で、皆より大幅に遅れてABCに到着する。6日以来荒れ模様の天候だが、相変わらず強風が吹きつり、各隊の上部キャンプの相当数が破壊されたという。この間、我が隊のシェルパたちも結局C4から上にはほとんど動けず、C5の状態は不明という。

5月12日 快晴になるが、地吹雪模様の強風。当初、今日から1次隊がアタックに向かう予定であったが、上部への荷揚げが滞っているため、出発は出来ない。

5月13日 快晴、久しぶりに風もおさまる。荷揚げ再開のためシェルパたちはC4へ上がる。ところで、ここへきて桑原がほとんど食えなくなり、このままではABC滞在だけでも危うい体調となる。順応段階でこれまでになく好結果が得られたことに気を許してか、私には内緒にしていたが、BCでの休養中、好きなアルコールに親しみすぎたらしい。高所での飲酒は体調を整えたり疲労回復などの観点からは決してプラスにはならない。飲んだことが響かないだけの体力がある者ならかまわないとも言えるが、高々齢で基礎体力不足の桑原にとっては結果として決定的な事態を招いたといえよう。残念だが登山続行を断念することとなった。

5月14日 朝は快晴無風、のち高所は風強まる。シェルパらは遅れているC6への荷揚げのために早朝C4を出発。彼らはC5までの荷揚げ班と、そこまで空身で行ってC6に荷揚げする班とに分かれて行動する。心配していたC5は無事であったという。我が隊のものはメーカーにアイデアを出して耐風性を大幅に高めた高所仕様改良テントなので大丈夫だろうと思っていたが、これでひと安心。

5月15日 朝は未だ弱い風雪模様だったが、頂上に行く頃には絶好の天気になることを確信して1次隊（倉橋、永田、佐藤、橋本、坂本）をC4へ送り出す。桑原はキッチンボーイのドルジェに伴われてBCに下山。貫田氏が別のグループを連れて19日に再度BCを訪れる予定になっているので、その下山時に桑原をカトマンズへ連れ帰ってもらうことにする。この日、サーダーのベンバ・ツェリンがABCに下りてきた。50代半ばの彼にとって昨日のC4からC6へ荷揚げのための往復行動がこたえたらしい（彼は以後C5以上への荷揚げに加わることはなく、アン・ギャルゼンの離脱と共に痛手となったが、その他のシェルパたちの活躍は目覚ましかった）。

5月16日 快晴。1次隊はC5に移動（睡眠用酸素使用）。だが、2次隊は今日もABCに停滞で忍耐の日々が続く。C5、C6の収容能力の関係で1次と2次のアタックは中1日おいて行動する必要があるからである。

5月17日 今日快晴、しかも微風だ。いよいよ好天期間が到来した感じである。1次隊は行動用酸素を用いてシェルパと共に8,200mのC6地点に到着し、少ない雪を削って盛って“宅地造

1. 登山記録

成”し、最終キャンプのテント2張りを設営する。共にアタックするアン・ミンマと共に早目に就寝体勢に入る（睡眠用酸素使用）。2次隊（近藤、西嶋、矢野、川原、正木）もようやく時が来て、C4へ移動。

〔4〕3次8人が登頂に成功

5月18日 1次隊は午前0時に起床して3時過ぎには出発（行動用酸素使用）。絶好の好天の下、昭和山岳会、インド隊、ロシア隊などと各隊のシェルパら、約20人が相前後して頂上を目指す。昭和隊のシェルパとアン・ミンマが先頭集団を構成し、古い固定ロープを補修したり新たに張っていく。続いて我が1次隊が続くが、一時的に佐藤や坂本がシェルパを追い越して先頭に立ったりするほど好調に進む。この間、2次隊はC5を目指すのが、正木は不調で早々に断念してC4に引き返す。近藤も不調で、明らかに7,600mまで1度行っただけでC5宿泊も未経験という順応不足が響いているようだ。その上、登頂目前の1次隊との交信で何度も急斜面の途中で立ち止まらねばならずいっそう体力と時間を奪われる。“プレーイング・マネージャー”の辛いところではある。

12時35分（ネパール時刻）、1次隊はついに倉橋以下順次、世界最高峰の頂に立つ。今春この山頂への一番乗りだ。数分後、昭和隊の2人も到着。さらにインド隊やロシア隊などが続く。約30分後、無事にC6に帰ることを誓い合って下降開始。2次隊は西嶋、矢野、川原はC5に入るが、近藤は苦しみながら約7,500mまで達したものの、結局断念してC4に引き返す。1次隊は全員無事C6に帰着する。C4に戻った近藤は正木と共に新たに第3次アタック隊を編成することを考慮に入れ、長引く高所滞在からくる高所衰退を抑える意図で睡眠用酸素を使用する。このような「低所」で酸素を使うのは近藤にとって初めてだが、この際「登頂第一」と割り切る。

5月19日 1次隊は下山を始めるが、倉橋は昨日サングラスをし忘れて行動した報いで雪盲となり、下山できずC6にとどまる。2次隊の3人はギャルゼン・シェルパと共にC6に入る（行動用および睡眠用酸素使用）。近藤、正木は明日あらためてC5入りを目指すことにしてC4で休養(?)する。（この日は昭和隊、テレ朝隊各2人も登頂。）

5月20日 好天が続いている。倉橋の目は回復し、ABCに下山。2次隊は11時半、矢野がギャルゼンに続いて登頂成功。この日はネパール側からの今季初の登頂者が多数あり、頂上で遭遇。続いて川原も登頂成功。57歳182日で登頂した彼はチョモランマにおける日本人最高齢登頂者になった。一方、西嶋は「第2ステップの上に達したものの酸素が残り少ない」と無線で伝えてきた。突っ込めば明るいうちにC6に帰るのはまず不可能な時刻でもあり、「無理せぬように」と告げる。西嶋自身も冷静な判断を下してそこまで断念するが、頂上に後わずかまで迫りながらの惜しまれる敗退であった。近藤、正木はダワ・シェルパと共に3次隊とし

1. 登山記録

てC5へ移動（睡眠用酸素使用）。

5月21日 近藤、正木は行動用酸素を用いてダワと共にC5を出発。近藤にとっては行動用酸素を使うのも初めてだ。明日に備え、いろいろ調節して最も効率的な流量を探る。7,900m辺りから北稜を離れて右斜上するが、ここでC6から下りてきた2次隊のメンバーと順次すれ違う。これほどの高度にもかかわらず驚くほど雪が少ない。常時吹きまくって雪を飛ばしてしまう北西風の強さが分かる。切れ切れの雪壁をつなぐようにして登り、C6に入る（睡眠用酸素使用）。

5月22日 3次隊は0時半に起床したものの準備に手間取り、4時出発となってしまった。しかも直後、正木がスピード不足のためアタック断念を申し出、近藤とダワのみでのアタックとなる。幸いにも今日も好天が続いてくれている。C6からスノー・バンドを拾いつなぐように右斜上する。途中、古びたテントか何かの布切れに包まれた遺体と思われる物が半ば雪に埋もれている脇を通過する。8,400m付近で北東稜上に出るが、その手前で早くも行く手の頂上が朱に染まり始め、続いてチョー・オユー（8,201m）、その左奥のシジャパンマ（8,027m）の頂も夜明けを迎えた。いずれもかつて私が登頂した山だ。北東稜は左側がカンシュン氷河へと急峻に切れ落ち、大きなものではないが雪庇も出ているので稜のわずかに右下をたどる。間もなくルートは北西壁側をトラバースして行くのだが、これも行く手を岩壁にさえぎられる。第1ステップと呼ばれる難場だ。固定ロープがこの壁の中を右斜上して延びているので、それにユマールを噛ませて登り始めるが上部は傾斜が強く、岩角も細かく登り難い。結局ここはロープから外れて壁の左縁から上縁にかけて続く雪の乗った外傾したバンド伝いに登る。アイゼンの置き方が限定されるやや微妙な登りを要求されるが、着膨れしている上に酸素マスクから洩れる呼吸で眼鏡も曇るのがわずらわしい。落ちれば北西壁基部まで2,000mを真っ逆様だ。慎重に一步一步登ってリッジ上に抜けると、そこはテントが1～2張り張れそうな小平地状をなしていて、先行していた白人男女のカップル（後の情報ではロシアのアルセンチエフとアメリカのフランスの夫婦）が休んでいた。我々も小休止し、無線機でABCに状況を伝える。

カップルは2人で1つだけのザックをここにデポして空身での無酸素アタックである。彼らに続いて我々も出発するが、すぐまた稜の右手のスノー・バンド伝いの水平トラバースになる。行く手には威圧的な第2ステップの岩壁が待ち構えている。すぐに先行カップルに追いつき、追い越す。酸素使用の威力ともいえるが、何よりも女性のスピードが遅く、男性がそれに合わせて動いている。バンドが尽き、いよいよ第2ステップに差しかかる。まず、数mのクラック状を登り、右へ上がって岩角を回り込み雪壁を10mほど直上すると2面の垂壁が交差した大凹角の下に出る。両壁とも平滑で普通ならとてもルートにはなりそうもない

1. 登山記録

が、この右壁に有名な「中国隊の梯子」が設置されているのだ。75年に中国隊が残置したもののだが、その後このルートに登る誰もがその恩恵を受けている。ただし、この梯子があっても突破は意外と厄介だ。案の定、先に取り付いたダワは梯子上で逡巡を繰り返し、そのうち不安定な姿勢のままオーバー手袋を外そうとして落としてしまったり、挙げ句の果てはピッケルまでも落とす。幸いこれは下の雪に刺ささったが、結局突破をあきらめて下りてきてしまった。この間ゆうに30分は経過していた。しょうがない奴だな、じゃ俺が行くか、と近藤が出ようとした時、すでに迫り着いてきて待っていた先程のカップルの男性が素早く梯子に手をかけ、実に見事に短時間で抜けて上部に姿を消してしまう。無酸素にもかかわらず見事なパワーであった。

続いて私も梯子に登り始める。なるほど確かに登りにくい。近くに固定支点が得られないために、辛うじて梯子が乗る程度の大きさの岩の上にそっと置くように据え付けられ、上方の岩角から延ばされたロープで梯子上端が結ばれているだけだ。グラグラ揺れて手前に倒れかかるような感じになるのでいい気分はしない。しかも梯子の上端は岩場の上まで達しておらず、抜け口には岩がかぶさっているので最後の数歩はアイゼンの前爪だけで岩角に立ち、固定ロープ頼りにやや強引に右上して抜け出る必要があるからだ。こういう所はあまり時間をかけると余分な疲労を招いてしまう。手順を考えた上で私も一気に抜ける。最難関を突破してホッと一息。ダワも改めて登ってきたので、登高続行。第3ステップとも呼ばれる小さな岩場を抜け、三角雪田と呼ばれる雪壁にかかる。ここは40～45度と思ったより急傾斜で、固定ロープを約2ピッチ半たどって雪壁上部右辺に抜ける。北西壁側のバンドをトラバースし、突き当たりから階段状の岩溝に登る。抜け切ると北東稜の雪稜に飛び出す。いよいよ頂上も間近だ。雪稜のわずか右下をたどって行く。約10m進み、最後は左へ折れて一登りで頂上に飛び出した。時に10時40分。C6から実質6時間ほどで到達したことになる。

世界の最高点に立った気持ち。それはもちろん嬉しいものだった。しかしそれ以上に心を占めたのは「意外と容易に登ってしまったな」という率直な思いだった。過去の隊の報告を読むとほとんどの人は大変な思いをし、実際に少なからぬ人が生還できなかった場所という先入観が強かっただけに……。これには、4日前に登った1次隊以後、すでに数十人もが登頂していること、第2ステップの梯子の存在、絶好の晴天などなどの好条件、さらに私にとってこれが7,000～8,000m峰の登頂16回目という経験も感激性を薄めてしまったのかも知れない。しかし何よりも酸素ボンベの助けを借りたことが充実感を大幅に削いでしまったといえる。この時、私は56歳181日で第3位高齢登頂者となったわけだが、高齢登頂という事実は事実としても、酸素を吸わなきゃ登れなかったものを吸ったら楽々と登ってしまったのもまた事実である。人それぞれ登山行為に異なった価値観を持っていて当然だし、最高峰登頂

1. 登山記録

達成に素直に喜びを表わしている我が隊員たちには最大限の祝福を贈りたい。特にその10日前にルートを誤ってアタックを失敗した中国隊の例があっただけに、1次隊は未知への不安と緊張が入り混じった中での登高となり、格別の充実感を味わえたに違いない。ただ、私自身について言えば、全力を傾けたうえで目標を達成するところに喜びを見いだすというのが私の登山の原点であったはずなのに、これは何とも拍子抜けする“凱歌”だった。もっともこれも、酸素を吸って登ったからこそ明確になった感慨であることは確かなのだが。

この日はネパール側からの登頂者もなく、とても静かな頂上だった。その雪の上には信仰心の厚いシェルパらの手によってドライ・ラマの写真やカタ（祈禱の布）が多数供えられていて微笑ましい。だが何とということか！ その真ん中には使用済み酸素ボンベが複数棄ててあるではないか。この山では自分自身を遺体として「残置」してしまう人さえいるほど厳しい環境なのだから私もルート上に点々とボンベが打ち捨てられているのを見ても、全部が全部けしからんといった気持ちにはならなかった。回収するつもりがあっても出来なかった多くの人たち。だが、これを見たときは愕然とし、とてもいやな気分を味わった。せめて神聖なる世界最高点にだけは棄ててほしくなかった。

ともあれ、しばし酸素ボンベを外して登頂成功の報をABCに送る。さらに妻から預かってきた義妹（20年前に冬の北鎌で遭難死）の遺髪を雪中に埋めたりして時を過ごす。突然ネパール側から雲が湧いてきてローツェやマカルーの姿がかき消された。下りについての技術的な心配はまったくしていなかったが天候悪化は最大の敵だ。2年前のロブ・ホール隊らの悲劇が頭をよぎる。長居は無用だ。

11時10分、下山を開始する。三角雪田も下りきり、第2ステップの上に差しかかるとそこには例の白人男性がいた。「コングラチュレーションズ！」と声をかけてくれる。だが、往路にここで別れてからもう4時間程が過ぎているのに、まだ女性のほうが第2ステップを登り切っておらず、登って来るまでしばし待たされる。ようやく登ってきたので我々は下りに取りかかる。別れ際、まだ先へ行くのだろうか、それとももう引き返すのかなと思ったのだが、後の情報では彼らは結局登り続けた末、生還できなかったという。ステップの下りは梯子に乗り移るまでが厄介だが、後は問題ない。第1ステップへの途中で無酸素の単独行者と出会う。こんな時刻に頂上を目指すのだろうかといぶかりながら、すれ違う（後の情報では彼はウズベキスタンのR・ラドゥガノフで、登頂前と直後に先のカップルと出会い、下山を促したが聞き入れられなかったという）。我々は15時過ぎにC6に帰着。

5月23日 近藤はC6の荷を荷下げ用に整理した後、空の酸素ボンベ2本を担いでC4まで下る。シェルパによる荷下げ始まる。翌日は1次隊の5人がC4に荷下げに往復し、近藤もABCに下る。

1. 登山記録

5月25日 上部キャンプの撤収・荷下げ完了。夕方、荷下げのヤクが上がってきた。

5月26日 ABCを撤収してBCへ下る。ABCの各隊のゴミはチベット登山協会手配のヤクで下ろされることになっていたが、我が隊は下ろす物資が少なかったので余ったヤクにゴミを積んで下った。

5月28日 ジープ5台とトラック1台に分乗して早朝BCを出発。今日中に中国を出国して、夜中になってでもカトマンズまで帰り着きたかったのだが、ザンムーの出入国管理事務所の閉所時刻が18時（ネパール時刻15時45分）と早いため、ザンムー・ホテル泊まりとなった。

5月29日 カトマンズに帰着し、本隊9人は31日にネパールを出国し、帰国した。

6月7日 近藤ら3人も後片づけを終えて出国、帰国。

あとがき

「登山研修」の貴重な紙面を大量に使って報告させていただいたが、世界最高峰の登山報告としてはこれでも当然紙数が足りず、最低限の登山の流れを追うにとどまったことをご了解いただきたい。

文中に記した登頂時の個人的感慨とは別に、隊長としては11人の登攀隊員中8人を登頂させ得て、日本隊史上最多登頂という成功に導けたのには大きな満足感を抱いている。

しかし、そうした表面的な記録面とは別に、短期間（本隊71日間）、低予算（メラ登山を含めて1人約180万円）でこれら成果を実現できたことは、勤労者が多少なりとも世界最高峰に挑戦し易い道筋を付けられたのではないかと自負している。低予算は過剰な物資を持ち込まなかった結果だが、このことは山へのゴミの残置量をゼロに近づける効果も生んだ。ゴミのことに言えば、エベレストのような超高峰ではなかなかきれいごとにはいかない。だから今回我々は最初から「下ろすんだ！」という強い意志を持つことをシェルパを含めた隊内に徹底させて登山に臨んだ。その結果は上記した厳しい状況下では100%とはいかないまでも、大半を下ろすことができた。

ところで、前年のローツェ登山もそうだったが、こうした超高峰の登山では「超人」でない我々はシェルパの荷揚げ能力に頼る比率が極めて大きくなり、酸素使用は別にしても、「自らの力で登った」という満足感が薄められるのは事実である。今後は、この満足感・充実度を高められるような登山を求めて各自が努力していければ最高峰登頂の成果がより花開くことであろう。



（日本勤労者山岳連盟1998チョモランマ登山隊長）